

上小地方に初記録のシダ 3 種

望 月 精 一

S. Mochizuki : Three kinds of fern newly found in Jōshō-district

ミヤマウラジロ *Cheilanthes kuhnii* var. *brandtii* Tagawa, ヒメウラジロ *C. argentea* Kunze, コバノヒノキシダ *Asplenium salerii* Hook.

上記のシダを 3 種とも小県郡東部町に初記録することが出来た。ミヤマウラジロとヒメウラジロはともにイノモトソウ科のシダで、日当りのよい乾燥した岩上や石垣、または溶岩のすき間などに生じ、葉の裏面が白色で極めて折れやすいシダである。「原色日本羊歯植物図鑑」(保育社)によれば、ミヤマウラジロは関東および中部地方の山地にやや稀に産し、ヒメウラジロは、岩手県の一部、関東地方、和歌山県の一部、中国、四国、九州に分布するとある。

県の東部に隣接する関東は群馬県で、北より吾妻、碓氷、甘楽、および多野郡と並び本県の北佐久と南佐久郡に接している。「群馬県植物誌」によれば、碓氷郡にヒメウラジロの記録がないのみで、上記のどの郡にも両種の記録がある。筆者は甘楽郡、妙義山系の西部において両種の混生地をみているので、若し本県に接するならば南北佐久にと見当をつけていたが、みることは出来なかった。

たまたま昨年(1983年10月15日)東部町の調査時に思いがけなくミヤマウラジロを発見した。これがあればヒメウラジロの存在も可能と思い、付近を広く探した結果遂に発見することが出来た。両種とも少なく、ことにヒメウラジロの方は個体数が極めて少ないので貴重なものである。佐久をとび越えて上

小に記録出来たことは以外であった。ミヤマウラジロは奥原先生から佐久の荒舟に産することをお聞きした。「軽井沢の植物」(原・佐藤・黒沢)には矢が崎山に稀産とあり、杉本氏の目録には北佐久(軽井沢、立科、本牧)南佐久(荒舟)に、ヒメウラジロは北佐久(大日向、小諸、浅間)南佐久(荒舟)に両者とも溶岩のすき間に稀生するとあるので、やはり関東から南佐久、北佐久に入り、軽井沢、浅間、小諸そして東部町まで適地を求めて続いていることが解った。今後は記録された場所の現存を確認したく思っている。

コバノヒノキシダ(チャセンシダ科)は、ヒノキの葉によく似たシダで、関東以西の本州、四国、九州に分布するもので、前記ヒメウラジロなどを探しているうちに発見出来たもので(1983年10月15日)意外の連続であった。先年、田川基二先生が紀州の調査から帰えられた後にヒノキシダ、コバノヒノキシダ、イワヒトデ、などの珍しい暖地性のシダを沢山見せて戴いたことがあり、以来数十年ぶりに寒地でこれをみたからである。これも個体数が極めて少なく貴重である。杉本氏の目録によれば暖地の岩壁や石垣の間に産するとあり、北佐久、西筑、上伊(美和、中田切)、下伊(大鹿、木沢、上村、和田)などの遠山地方に記録されている。「信州、佐久の植物」には松原、布引に記録がある。また群馬県では県内各地に産するとあり、関東側では分布が広い。

〔植物ニュース〕73. シロバナアブラギク

Chrysanthemum boreale × *C. makinoi*

これはキクタニギク(アワコガネギク)とリュウノウギクとの自然雑種で、「長野県史蹟名勝天然記念物調査報告」10輯に小泉秀雄氏の「希品シロバナアブラギクの自生地」として詳細な報告があり、産地は上田、松代、北佐久とある。

先年「上田小県誌」のための調査時に、上田市郊外の3か所で本品を確認したので第四巻の自然編に上記の小泉の報告を抜粋して記載することが出来た。その後20余年、「長野県植物誌」の調査にあたり、現存するものか気掛りであったが、一昨年の秋に花期の過ぎた1株をみつけ、続いて昨年(1983年10月

22日)花の適期に再確認することが出来た。花色は淡黄色で美しく、舌状花の大きさ及び葉の切れ込み方は両親の中間型である。

これとは別に小県郡の丸子町でも(1982年10月28日)新しく発見することが出来た。これは舌状花が白色でリュウノウギクの性質が強く現われているのが上田産と違っている。両地ともキクタニギクとリュウノウギクの混生地であることは勿論である。上小ではリュウノウギクは山地に、またキクタニギクは山足、路傍、土手などに極めて多い。奥原先生には東部町のシダ及び丸子町と上田市のシロバナアブラギクの産地を確認して戴いたことを厚く御礼申し上げます。(望月精一)